

人を呪わば

国枝史郎

青空文庫

一

「あの、もしもし」

と女の声。

振り返って見ると白い物！ 女が軒下で招いている。

午前三時！ 深夜である。

「え、お嬢さん、何かご用で？」

一條弘、若き新聞記者。年齢二十四。慇懃に訊く。

場所は大阪。川口あたり。――

「一緒に連れてって下さいよ」

「だが、一体どうしたんで？」

「お願いですよ。……妹だと云つてね」

「ははん」と一條感付いた。こん畜生め！ 地獄だな。

「ね、お願いですわ。助けると思つて。……だつて非常線が。……困っているのよ」

「よし来た」と義侠心を揮い起こす。何んていうんだい、君の名は？」

「お君つてのよ。お願いだわ」
で、一緒に行くことにする。

「もしもし」と二三人が呼び止める。

私服の警官諸兄である。

「こんな夜更よふけに。女連れで……」

「やあ、今晚は」と一條弘。「何か獲物でもありましたか。……」

僕、記者ですよ。B新聞の」

で、名刺を進呈する。

「やあ」と直すぐに仲宜なかよくなる。「少し遅いじやありませんか。」

……で、連れのご婦人は？」

「ええ、僕の妹でね」

警官諸兄クスクス笑う。

ちやあんと感付かいているらしい。

それも其その筈はずさ、似にていないんだから。だが、警官と新聞記者だ。

昔から親友ときまっている。

「いいから愉快にいらつしやい」

「アツハハハ、左様なら」

で、愉快にグツドバイする。

「君の家は何処なんだい？」

「××町よ、送つてつて頂戴」

恐しく穢きたないみじめな家。

「この二階なのよ。寄つていらつしやい」

「うーん」

と云い乍ながら寄つて了しまう。寝道具一式、鏡台一個。——商売道具

だけは揃っている。

「もう遅いわ。泊まっていらつしやい」

「だって無いぜ。金なんか」

「いい事よ。お礼だわ」

で、二人は幸福になる。

×

雀が啼ないて朝になる。

「おい僕は失敬するぜ」

「いいじゃあないの、もつと在いらっしやいよ」

地獄奴め、一條に惚れたらしい。一條その頃は好男子だった。

少し社のことが心配になる。女の顔をチラリと見る。まんざら踏めない顔でも無い。

「へ、かまうものか、休んで了え」

休むことなんか珍しくない。

で二人、復^{また}幸福。

その翌日出社する。

同僚が肘で横つ腹を蹴る。

「どうした——、え、昨日は？」

一條、厳肅な顔をする。「うん、実は、腹痛でね」

「おい、部長に叱られるぞ」

「え!?」と一條飛び上がる。「何か有ったのか? え、何か!?」

同僚、無言で新聞を拡げる。

競争相手のA社の新聞!

一号活字、二段抜。

「西警察署の大捕物」

——ちやんと綺麗に素破すっぱ抜かれています。

「一條君！」

と部長の声！

そうさね、まるで雷のように響いた。

好漢一條氏の悄しよげ気方と来たら。

直立不動。部長の前。

部長美髯をひねり上げる。

「君、昨日は何どうしたんだい？」

「え、実は、頭痛がして」

「家で静養でもしたのかい？」

「ええ、そうなので……医者を呼んで」

「不思議だね、こいつは不思議だ」部長ひどく不思議がる。「使をやったら不在と云ったが……」

やッ、一條の周章あわてまいことか！

「そ、それじゃあ、その時には……」

「よろしい！」と部長一喝する。「以後注意！ 素破抜かれないように！」

一條一散に自席へ帰る。

さて、原稿紙は拵げたが、一体書くことがあるのだろうか？

その日一日マゴマゴする。

あっちへ行つては冷かされ、こっちへ行つてはこづき廻される。

退社時間。午後の四時。

一條そろそろ元気づく。

二

三四人悪友が集まって来る。

「おい、一條ヘカツを入れてやれ」

「しよげ悄気るな悄気るな、行こう行こう」

「ワーツ」というので飛び出してさう。

さて行先は？ 珍しくもない、たこ梅というおでん屋だ。

で、其処での大気焔。

悪友A氏 「俺が大臣になったらな。……」

悪友B氏 「俺が洋行した場合にはな。……」

悪友C氏 「我輩社長になった際にはな。……」

「な」「な」「な」と「な」ばかり。そこへノツソリ這入^{はい}つて来たのは、A新聞社の西警察係、太田君という敏腕家。

「ヨ——」「ヨ——」と双方で云う。

しかし無邪気に話そうとはしない。

つまり競争の相手だからで。

「一條君昨日は何うしました？」太田君ニタリと重く笑う。「貴^あ郎^{なた}が西署へ来なかつたので、僕お蔭様で素破抜きましたよ」

一條に文句のある筈がない。

「左様なら」「左様なら」

で、太田君行つて了う。

「一條の馬鹿奴、冷かされやがった」

A君一條をひどくカラカウ。

一條に文句のある筈がない。

「ああ酔つ払つた、別れようぜ」

そこで一同散会する。

「お君つて女、どうしているかな？」

一條ちよと鳥渡ちよと気にかかる。自然足がそつちへ向く。

いつか其家の前まで来る。

「今晚は？」

と声を掛ける。

「お上んなさい、二階に居ます」

宿の婆さんが頤あごをしやくる。

チヨコチヨコと一條二階へ上る。

「いらっしやい」

と云う女の声。お君の声と少し違う。

もつと別嬪べっぴんの女がいる。

「おや、お君ちゃんは居ないのかい」勝手の違つたトボケた声。

「ええ、今夜は妾あたしなのよ」

「ははあ此部屋このは出張所なのか」

「ハイカラに有仰おっしやいよ、倶楽部かつてね」

「ああ成程、私娼倶楽部か」

記者としては詩人に過ぎ、詩人にしては記者に過ぎる、不幸な美的記者の一條氏、倶楽部という言葉が気に入ったらしい。

「お君ちゃんが居ないなら失敬するよ」

「あら、妾では気に入らないの」

「なあに君の方が可いんだが。……」

よくないのは持ち合わせらしい。

「貴郎、新聞社の方でしょうか？」

「ははあ、お君ちゃんが話したな」

「ええ然^そうよ、詳しくね。……でもよく助けて上げたわね。……

妾、お君ちゃんと親友なのよ。……お礼心よ、泊っていらつしや

い」

友情掬きくす可べきものがある。

何んの一いっ條がかぶりを振ろう。

で、二人幸福になる。

雀が啼いて朝になる。

「今朝は早く帰らなけりやあならない」

「せめて夕方までいらっしやいよ」

不安乍さらも居ることにする。

チリンチリンと夕刊の鈴。

一いっ條女をして夕刊を買わせる。

一いっ号活字。三さん段拔。

「西警察署の大捕物」

どんなに悄気たつて追つ付かない。

つづけて二度も出し抜かれては。

×

「爾今出社に及ばず候」

一條の戴いた辞令である。

×

太田君とそうしてお君との会話。——

「一條つて奴は名文家でね、同じ材料を使つても、彼奴きやつが書くと活きて来る。同じ西署詰の俺とに執とつては、謂いわば苦手と云う奴さ。

……彼奴ひどくひどく夜更かしが好きでね、毎まい々まい非常線に引つかかる

そうだと。……そこでお君ちゃんを活用したのさ。……彼奴鳥渡詩人なんだよ。詩人と云う奴は飽きつぽいんでね。同じ女じゃあ不^け可まいと思つて、そこでお絹さんにも頼んだのさ」

「では頂戴よ、あの人の分まで」

「よし来た、これが彼奴の分だ……」

十円札を墓口から出す。

×

一條へ来たお君からの手紙。――

「これを持って今夜いらつしやい」

十円の為替が這^{はい}入っている。

「そうそう非常線に引つかかるものか」

一條為替を返送する。

三

お君不機嫌に独言を云う。

「あの人なんだか可哀そうだから、今夜呼んで太田の話を、ぶちまけて話してやった上、すぐに暮らしに困るようなら助けてやろうと思ったんだが、女から送った十円ばかりの金を、送り返してよこすような、そんな正義派の男なら、妾、見返つてもやりやあしない」

こうして三ヶ月経過する。

A新聞社の編集局。

社会部長顔をしかめ、太田に向つて小言を云う。

「近来書く物がひどく不味^{まず}い。本来名文家じゃあ無いんだがそれでも三ヶ月前までは、活気のある文章が書けたのに。君一体どうしたんだい？」

太田心中で嘆息する。「競争相手を追つ払うのも、考えて見れば可^よし悪^くしだ。……一條の奴が居た頃には、負けまいと思つて書いたので、活気のある文章が書けたらしい」

×

「爾今出社に及ばず候」

太田の受け取った辞令である。

「穴を二つ掘ったつてもものさ」

青空文庫情報

底本：「国枝史郎探偵小説全集 全一卷」作品社

2005（平成17）年9月15日第1刷発行

底本の親本：「探偵趣味」

1926（大正15）年5月

初出：「探偵趣味」

1926（大正15）年5月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：湖山ルル

2014年4月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

人を呪わば

国枝史郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>